



TITLE:

北樺太[採]集記(中)

AUTHOR(S):

玉貫, 光一

CITATION:

玉貫, 光一. 北樺太[採]集記(中). 地球 1926, 5(2): 143-155

ISSUE DATE:

1926-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183056>

RIGHT:

北樺太採集記

(中)

玉 貫 光 一

一、國境に立ちて

七月二十七日、數日を亞港に費やして色々準備を整へたので愈々奥地探檢の行を採ることになる。軍政部の御用船が遠くシユミット半島近くに航行中とかで我々は僅々三十噸内外のサガレン丸と云ふ小蒸汽の人となり、午後七時半國境のピレオへ向けて航行の途につく。曇つてゐた空は日没頃から一層黯黹として雨氣さへ含んだ夜雲はひしひしとおしせまり我々の氣持を少なからず不安にする。夜の更けるに従つて風は加はり、船はピツチング、ローリングの限りを極めて、亞港より近々三里のドーエ炭坑の灯が波間に隱見する頃には船の人に上陸を強請する程に參つた人さへあつた。一同は船辭のマキシムを味はつて約八時間の難航を了し朝明けのピレオの風物に接した時は苦しい顔のどれもが蘇生の微笑を浮べたものである。風落ちた海にはカモメの群が白い腹を見せて浮ぶ間をギリヤークの操つる獨木舟は我れ等を陸に運んでくれた。ア港から連れて來た人夫達も流石に青靄めた顔をしてゐる。我れ等の爲に特に案内役として軍政部より來られたK氏に導かれて露人の保管してゐる大きな宿舎に落着く。宿舎の裏に湧き出づる水の様な泉に煤煙と疲勞の顔を清め人夫達の手になる朝飯を食ひ生物班(動植物、昆

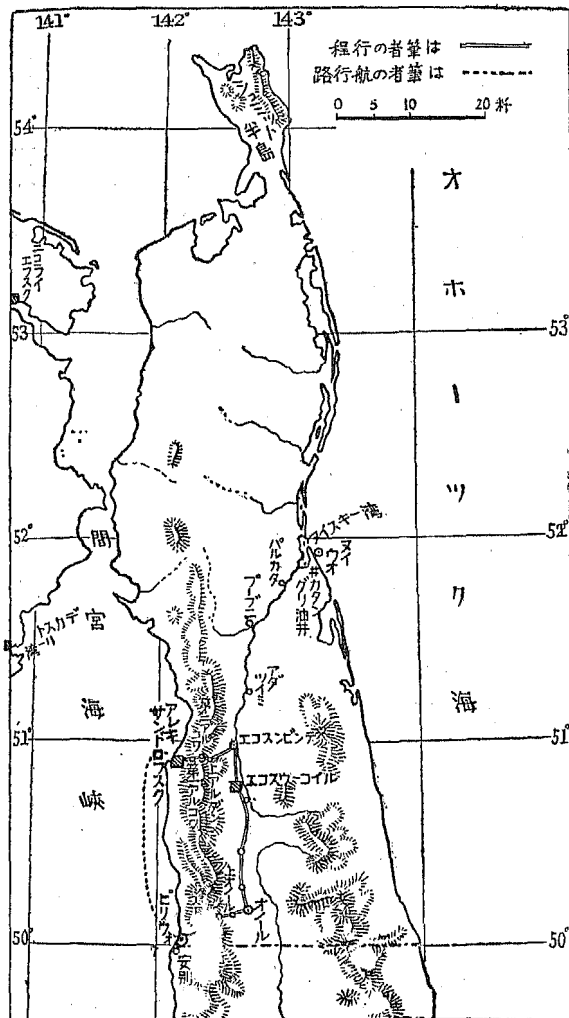
蟲)は打ち揃ふて尙ほ二里南方の國境附近迄採集に出る。

第三紀層の赭土の斷層は果てなく續き、あくまで澄んだ潮の音もなく寄せては返す海濱を國境標指して進む一行は昨夜の疲勞と恐怖は全く拭き去られてしまつた。時ならぬ侵入者に驚いて斷層を攀つるカラフトイムシ *Coluber lewis* L. や可憐なカラフトカナヘビ *Lacerta vivipara* Jacq. 等は動物のI氏に、崖の上に紫紅色の花を附けて羽狀に開いた葉を朝風にそよがせてゐるピレオギク *Chrysanthemum Weyrichii* の紅色の花を持つキリンサウの類 *Sedum* やこの地特産のカラフトサウ *Sedum sachalinense* 等の海岸岩生植物の類はK助教授の胴籠に納められてゆく。雌の上に生えてゐるエゾマツやアカトドマツ等の常緑針葉樹やグロビツ *Larix dahurica* Turcz. 等は吹き洒しの濱風に生長を妨げられて矮小萎縮して所謂クルマホルツの型狀を呈してゐる。圓い小半島を迂迴し我れ等は國境の標示石の座してある場所へ通ずる小路に來た。一面に生ひ繁れるカヤツリグサの類を分け入りて漸く標石のある所へ着く。標石は高さ約三尺内外の軟石を以て造られ上部は錐狀に切られてゐる。南面には大日本帝國領と記されて大剣花紋章を印し、北面には嘗ては帝政ロシアの千八百年代の初葉にムラビヨフ總督が東方侵略に始めて東亞に現はれた双頭の大鷲の翼を張つた紋章が刻せられてゐる

既に廢せられたこの紋章を見る人は國亂れて山河有りと言ふ一種の感慨に打たれるのである。

遙かに見下せば茫々と靡く薄草の果遠く最北の我が日本の村落である安別の部落が秋の陽の様な北國の日差に淋しく照されて見える。この附近にはシベリヤやカムチャツカ等に廣く分布してゐるが木邦内では北海道と樺太にのみ限られて棲息するミヤカケス *Garrulus glandarius brandtii* E が極めて多く、

四、五匹づゝ一團となつて銃口を向けても一向に飛び立たうともしない。此の鳥は一見普通のカケスに酷似してゐるが、頭部に黒色を混じてゐないので容易に識別することが出来る。夕暮宿舎に歸りストープを脊にしながら餘り感心の出来なかつた些かの今日の採集品を整理する。それでも亞港で採集し得なかつたウスバシロテフ *Parnassius subbendorffii hoana* S を三匹採つてゐる。



二、山脈横斷

二十九日、萬端の用意を整へて愈々此の行程中の最難關である南北樺太を縦走してゐる大山脈の横斷を執行するのである。

此の山脈の横斷道路は我が軍が保證占領の當時より多額の物資と工兵隊の苦心とに依つて最近に竣工したもので、西部の門戸であるピレオと東部のオノールの兩村の間には、逢見、青葉、青葉峠、上オノールの四驛舎を設け、横斷者の宿舎に當ててゐる。此の山道は主として冬季の用に供するを目的として開通せられたもので、即ち冬季海上が結氷してア港迄通航の不可能な場合に郵便物其他を犬楯に托して各地に運搬せしむべく建設せられたものである。自然夏季間の往來を極めて稀なる爲に間道は草藁に没し、濕地に架せられた橋梁は腐朽し横斷者をして非常なる努力を要せしめるのである。此の山道は青葉峠と呼ばれ、山脈の最高地である中央の青葉峠驛舎附近は約二千呎の高位を有して此の最高地點を分水嶺として東西に幾多の小谿を發し、その最大なるものは東に岐れて幌内川の支流であるオノール川となり、西に流れるものはピレオの海に注ぎピレオ川となつてゐる。之等の幾多の小流には非常には魚族が豊富であつて、ヤマベやイトナ等の淡水魚は横斷者の驛舎に於ける唯一の珍膳となるのである。

全山悉く針葉、潤葉の混交林を以て包まれ、特にドロノキ、シラカンバ、カラフトヤマナラシ、ミヤマハンノキ、キヌヤナギ、テリバアカダモ等の潤葉喬木類は亭々と聳え、特に高地に

於ては上位潤葉樹と稱せらるゝエゾノゲケカンバを見る事が出来る。又谷間にはアイヌアキやアキタブキの類が最大限度の生長をなし、實に六尺を越ゆるものさへある。鬱蒼たる針葉樹林帯に入れば落ち溜れる草葉は深く積み重なり、その上を踏めば泥炭地帯を行く様な彈力を感じる。陽のめぐみの少ない林下に生ずる草木はアヲネカヅラ科 *Polyodiaceae* のミヤマシダ、ウサギシダの類やフサスギナ、ウスバサイシン、ヒロハノスギカヅラ等が見られる。特にフサスギナの淡緑色の純群落は柔らかな感を抱かせる。その他色々蘇類が森林中の至る所にその緑の毛氈の衣を覆つてゐて、つくづくとその身の最果の地にあるを感じせしめるのである。

我れ我れは此の山脈旅行中に特産の色々な動物を親しく見る事を得た。

半朽ちかけた橋の上や倒木の陰等に蚊やその他の小見蟲を狙つてゐるカラフトヒキ *Bufo sachalinensis* Nikk. は名稱の示す如くに樺太の特産動物であつて、此の地方の動物地理學上に非常な役割を演じてゐるのである。本州内に廣く分布してゐるのはヒキガヘル *Bufo bufo japonicus* S. と呼ばれるもので其の分布は本州内に限られ(北海道には函館附近に之れが棲息するを見る)と云はれるが之れは人爲的に移入せられたものと思はれる。北海道を取り残して此の地に至つて別種同属のものが生活してゐると云ふ面白い事實を示してゐるのである。

わずかに陽の透る混交林の梢をキコタキ *Xanthopygia narcissina* T. 或ハ *Emberiza spodocephala personata* Temm.

セイウチガウ *Sitta europaea uuralensis*, Licht. 等の可憐な小鳥が囀りては飛び交はし、頭頂の血の様に赤いクレーゲラ *Picus natus* L. の天牛や玉虫の幼蟲を探るばとばと籠つた音は森林に深くこだまして淋しい。深く草伏す叢からば人のけはいに驚いてペンギンドリ *Tetrastor bonasia* L. やオホライテフ *Tetrao urogallus* L. 等がすわすわ羽ばたきをして飛び立ち。

此の旅の三日目遂々私達はヒグマ *Ursus arctos* L. に出會つた。逢見と青葉峠の兩驛舎間の急坂を喘ぎ喘ぎ登つて行くと前方を進んでゐた人夫達が熊だ熊だと青くなつて逃げて來たので案内に連れて來たピレオのキリヤークや動物の人達は銃に彈丸を込めて勇み立つて進んで行くので、我れ我れも怖れ乍らも好氣心かられて付いて行くと、道の廻り角の日當りのよい大きな立ち枯のドロノキの中途に二頭の仔を連れて日向ぼつこなしてゐる大きなヒグマを見つけた。それが多勢の足音に驚いて仔を連れて轉ぶ様に深い谿谷に下りてしまつた。その後から銃彈を浴びかけたが空しく影を失なつてしまつた。このヒグマは遠くアルプス地方からシヤリヤの曠野を涉り、ゲツタン海峡を乗り切つて樺太へ入り、一つはカムチャツカから千島列島、北海道迄延びて來てゐるものである。

熊を追つての道々ギリヤークは片言まじりの日本語で熊よりも怖し、オホヤマネコ *Lynx cervinus* T. の話をする。之はシベリヤ、支那、西藏、アルプス以北の歐洲等に廣く分布し、邦領では朝鮮、樺太の二地方に産してゐる。狼位の大きさをし、細々たる眼を有し。四肢は爪鉤狀をなして鋭く、耳の先端には

長毛を叢生してゐる。常に森林深き樹上に棲息して、鳥獸を捕食するものだが、深山中に生活する爲に捕獲困難で、昔數支廳管内で捕獲せられ豊原博物館に藏せられてゐる牝牡二頭の標本の以外に未だ捕獲せられないのである。

尙、文書に寄れば朝鮮を缺きヤマネコと同様の分布區を有するヒキウ *Felis*

uncia Schreber. と稱する灰色の地色に黒き豹紋を有し太く長い尾を有する動物も産するところがあるが、近來捕獲せられた事を聞かぬ。

オホヤマネコが好んで食餌にすると云はれてゐるシヤコウシカ *maschius maschiferus*



オホヤマネコネコ

(豐原博物館藏)

maschiferus L. も亦シベリヤ、北支那、中央アジア、ヒマラヤ等に廣く分布するが國內では我が樺太のみに産する動物で、森林中に棲息し、晝間は林中に在るが、朝夕は食を求めて徘徊するのである。食餌は多く地衣類や其他の嫩芽を採り、行動は極めて敏捷なのである。嚴冬の一月に交尾し、六月頃に一仔、稀

に二仔を分娩する。之の幼仔期間は極めて短目で一年を経ずして成熟交尾をなすのである。

シャコウシカは牝牡共に角を缺き、牝は膾と生殖門との間に鶏卵大の所謂麝香囊を有してゐる。特に此の麝香の分泌は交尾期に最も盛んなのである。麝香囊は褐色で、生きてゐる時はむしろ悪臭を有してゐるが、乾固すれば特有の芳香を發し、一頭分の香量は終二八グラム許りある。尙ほ此の動物の肉は非常に美味であるさうである。

冬になれば純白の毛色に變するエゾイタチ *Mustela erminea kanai B.* ヲコエゾイタチ

Mustela vulgaris L.

は栗毛の體軀を有し樹幹の洞から覗いては驚き顔に隠れてしまふ。苦しい一日の行程を終へて宿舍に蠟燭を點じ、汗みどろになつたりユツクサツクの中からドロツプスの甘味を採つて疲れ切つた身體を横たふれば、家近くシマフクロウの太い寂れた聲がする。シット耳を澄すと遠くの谷川の



大ヤマネコ

(豐原博物館藏)

せゝらぎさへも聞えてゐる。それは冷たい自然法則の發見に身を捧げる人々の胸に一脈の詩情の霧を育ぐくまぜるさびしい力であつた。

猛烈なヤブカの襲來と、下りになつた山脈の爲めに幅と深さとを増した谿流の渡渉とに悩まされた四日目の午後、オノールの兵舎から一行を迎へるべく派遣された三人の兵士の人々と出逢つて八月一日午後二時半無事にオノールの部落へ入つた。

駐屯隊の隊長である清水中尉の心盡しで、入浴も出來、オノール川から兵士の人達に依つて釣られたヤマベやイワナ等の新鮮な川魚で久し振りに釜の飯を戴たいた時は實に蘇生の思ひがしたのであつた。亞港から一直線の軍用道路を通つて我れ等探検隊の爲めに出張して來られたS通譯や、清水中尉の案内で夕暮、部落を散歩する。

此のオノールの部落は戸数が十八戸、人口百三十名程あつて小學教師を欠いて他は總て流刑者の家族で、特に此處の部落は全樺太中でも最重刑者が送られたものださうである。最近にも刃傷事件があつたとかで極めて統治の困難な部落なのである。農政經濟のF君はS通譯を頼りに、農家を一軒一軒親しく調査して廻るのを外に私達四、五の者は或る農家に息ふた。果の國とは言ひ乍ら八月の夜はさすがに暑苦しいので彼等はテーブルや椅子を戸外に持ち出して、蚊遣火をしながら一日の勞働をウオツカや温たかなパンや紅茶に依つて勞ふのである。遠い耕地に出てゐる留守を預かつてゐる此の家の主婦の好意によつて搾りたての牛乳に渴をいやして居れば牧草を山に積んだ四輪車が

トルストイ然たる白鬚の老人に依つて馭されて來た。間もなく皮帽子にルバシカの若者と彼等獨特の風俗である顔と頭とを廣幅の布で包んだ娘達とが、刃渡三尺餘もある弦月形の鎌を肩にして歸つて來た。私達は互にドラスステ(今日の意)を交はして彼等に席を讓つた。

陽は全く落ちて其處此處の丸木家からは乳色の煙がゆるやかに立ち登り、色々の家畜の聲がひとしきり賑はふ。馬は暗い厩に眠り、蚊柱が暗い軒先に立ち初める。廣い野面を流れて來る微風に庭先の白樺がひるがへり、空には遠く星が光り出す。

一杯のウオッカに疲勞を忘れた農夫達は期らかに夜の歌を唄ひ出す。それは我々に彼等の過去を暗い半生を思はせるには餘りに詩的な情景でもある。

私達は此の牧歌的な雰圍氣に旅情を休めて彼等とスパイネンノチ(御腰み)を交はしつつ灰の入つた部落の道を通り抜けて兵舎に歸つた守備隊で雇つてゐる朝鮮人のコックが腕自慢の料理で楽しい夕餉を丁へて私達は與へられた部屋に入つて今日迄の採集品を整理した。オノールの村へ入る二里程の所から森林地帯は一變して小灌木と雜草との准平原的な地勢になるので森林地帯では見られなかつた色々の蝶類を手にする事が出來た。

そのうちには樺太産として始めて記録せらるるものや新亞種又は變異として新しく記載せらるべきものすら發見したのである。今此の内數種の代表的なものを擧げて見る。先づ新亞種としては此目蝶科 *Salixidae* に屬するものではシロオビヒメヒカゲの變種である。このシロオビヒメヒカゲ *Coccyo nempha hero*

Pieris Ied は日本領地では北海道、朝鮮、樺太に分布し、西比利亞、歐洲に普通のもので北海道では比較的高位の所に見られるのだが、樺太では平地に最も多い種類であつて、開張は一、二分内外で、翅の色は暗黄褐色を呈し、裏面には前翅に二個、後翅に七個の黒色大小の眼狀紋を有し、兩翅の縁には細い栗地銀の一條を走らして、紋の内側には灰色の太い帶を有してゐるのである。然し私達が得て *Pieris Mats.* と名命せられたものは體も少しく小さく且つその特徴の一つである眼狀紋の内側の灰色帶が前翅の裏面には全々無くて僅かに後翅の二、三番目の紋の内側に楔形の一紋となつて現はれてゐるのみで、又七番目の紋は全部缺けてゐるのであつた。之れは多くの在來種に混じて僅かに雄を三頭得たに過ぎなかつた。

蛟蝶科 *Nemphalidae* に屬するものには開張一寸五六分で裏面は紫褐色の斑紋を有するチビウモン *Argynis selens onorensis Mats* を得てゐる之れは此度初めて樺太から記載せらるべき種類で唯一頭の雄の標本は非常に貴重視せらるべきものである。尙此種は廣く歐洲に分布してゐるものであるが全帶に歐洲地方のものより小さく翅の幅も遙かに狭まい。

又北海道に普通に産するフタサテフ *Nepis Coonidie ha-bata Heyne* は私達の此の採集以外には多くの人々に依つて南樺太の南部を採集せられてゐるのだが未だ一頭も採集し得なかつたものである。併し一般に北海道や本州に生活するものよりは個體が非常に小さい。之等の外に樺太に普通に産する類ではロヘウモン、ギンボシヘウモン、ウラギンヘウモン、ヒメヒ

オドシ等の完全な標本を多く手に入れる事が出来たのである。森林中の陽當りの良い場所には本州では高山蝶として貴重視せらるゝニヒカゲ、*Erebia sedakovii scoparia* (Butl.) と樺太と利尻島とのみに限られてゐるクモヤマニヒカゲ (*Erebia ligea schachnensis* Mats.) が入り混じり輕やかに飛翔してゐる。二種共に翅は黒褐色を呈し、後者は濃色で天鵝絨様の光澤を帯びてゐる。前翅の外縁に近く太い柿色の一帯を有し、その帯の中に瓢箪形と圓形の眼状紋を有してゐる。二者の違いはニヒカゲには柿色の帯が前翅にのみ限ざられてゐるがクモヤマニヒカゲには後翅にも有り、且つ、その内側に白雪の様なザクザクの一線を有してゐる。全體に後者は前者より遙かに暗色を呈し、翅の縁毛は純白である。この二種の間型とも稱すべき種類では *Erebia takanoni* Mats. と云ふものがあつて、之は前後翅共に柿色の帯を有してゐるがその中の眼状紋は非常に大きい。昔から高山蝶としてクモヤマニヒカゲと *Takanoni* とは珍重せられ、日本アルプスの八ヶ嶽、槍ヶ嶽等に産するものである。特に面白い事實は北に進むに連れて後者の數が多く見られる事である。ニヒカゲの幼虫は竹の葉を食するさうである。

私達が探検の旅に登るに先だつて、軍政部のS林務課長から南樺太南部の針葉樹(重にトドマツ)を數年の間に非常に食害したカラフトマツケムシ (*Deudrolimus sibiricus* Tschio.) の存在の有無の調査方を依頼せられたので時々トドマツの小木を振つて細密に調査したが一匹も見當らなかつた。唯、寄生菌やその他の影響で元氣を失つた樹木には相當にトドマツコシンクヒ

Polystichus proximus Blandf. や *Cassiope* シンクヒ *Ursus japonicus* Nils. 等が寄生してゐるのを見た。森林地帯に足を入れれば純黒のヒゲナガカミキリ *Monochamus* の類が鋭く樹の間を飛翔する。金屬的な琉璃色の色彩を持ち觸角や肢にムク毛を有する非常に美麗なバリエルカミキリ *Callidium violaceum* L. は此の山脈横斷中に得たる甲虫類の採集品中第一の嬌びを興てくれた。之れは廣く舊北洲の森林中に分布しゐる種類であるが未だ日本から採集せられた事を聞かないものである。其他樺太特産の甲蟲類としてはオグマカクゴロオサ *Cicindela ogumae* Mats. カラフトニヨラタムシ *Cucujus hematodes* Erichs. クロメザヨツカイ *Telephorus tristis* F. アラメオホゴキマンダシ *Upis semiboidea* L. 等を捕獲した。

夜も更ける頃採集品の整理を丁し限りなき學的喜悦に没り乍ら窓を開ければ、目下のオノールの部落、靜かに眠り、月の影はさやかに、明日指してゆく北の空にはゆるやかに雲の流れが見えてゐる。『おい明日も晴だぞ』机に向つて日記を書いてゐる同僚のK君に聲を掛け乍ら私は窓を閉じた。

三、國道の疾走

八月二日晴、五時頃に起きて忙しい旅装を整へたり、駐在の軍人の人々と記念撮影をしたりしてゐると百姓は馬車を引いて四五人づつ集まつて來た。馬車と云つても乗客用のそれではなく昨日の夕方渡邊が牧草を山の様に積んで歸るのを見た農耕用の荷馬車である。昨日ミルクを御馳走になつた家の少年もおや

ちと一緒に來てゐる。馭者は枯草を山の様に積み重ねて腰掛臺をこしらへてくれた。S中尉始め軍の人々の笑顔に送られて二十數臺の馬車は砂塵を上げて北へ進んだ。早畑へ出て牧草を刈つてゐる露人達は物珍らしげに長柄の鎌を杖にして我等を眺めてゐた。馭者達は早口にそれらの人々と言葉を交はして行く。

馬鈴薯畑、白い大根の

花、牧草畑、放牧の牛の群、木柵、それらの部落の風情を放れると馬はひとしきり足並を早め、道路・轍の跡が深まり眺望總て荒んだ焼野原の寂寞である道。路の両側に掘られた溝の中には無數のエゾシロテフの屍が浮んでゐる。これは非常に多いサンザシの花に集ひ風やその他の危険にあつて倒れたものであらう。此の一事に依つても寒地の昆蟲の個體發生力の強さを物語るものである。



國境附近の風景

陷穽の様な深い轍にひた走る車輪が落ち込む度に身體も荷物も沖に浮き擲さつけられそれを防ぐ爲の苦心は一通りでない。農家が二三軒より無い第一、第二、第三のハンダーサー村を

素通りして十時少し廻つた頃ダルクカン驛舎で馬に水を飲ませる爲めに小憩する。遙かに右手には前日横斷した山脈が脈々と聳え燒跡に生えた白樺の小木は無限に續き、八月の風に灰色の葉裏をひらくとそよがしてゐる。小さな驛舎の前に出された馬ぶれに顔を埋てゐる馬のどれかが汗ばんでゐる。間もなく又私達は車上の人となる。單調な風景と埃と汗と猛烈な振動と血を追ふて集まつてくるゴマフアブの群にさいなまれる中にタウラン村

も過ぎ
て或る
小流の
岸で晝
食を認
めた。
馭者達
の一團
をなし



馬車の憩ひ

て焚火を圍み大きな紅茶を吸り乍ら、黒麴麴を食し談笑するのを見れば私は獵人日記の主人公になつてゐる様な氣がしてひとりでに微笑が浮んで來る。

午後になつてあれ程に晴れてゐた空が一面に灰色の雲に包まれて來た。あれ程飛んでゐたエゾシロテフは影をだに見せなくなつた。三時過ぎ縦走山脈の支脈である松坂峠へ入つた。高さは左程ではないが起伏のばげしいこの峠に又眺望も甚だ壯麗で

ある。二十数臺の馬車はいっしか離れ離れになつて前方の小山を砂塵を立て、登つて行くのを見たかと思ふと早くも白樺の小林へ影を失なひ、振り向けば又一壺自分の後をひた向きに追つて来る黒い影が現はれて来る。馭者の鞭の音がはげしく響く。ことごとく覆はれた密雲のひとゝろ群青の空が現れ、日の光は左右に起伏してゐる白樺の小丘に金箔を放つてゐる。夕立に濡れた緑が反射する。通り雨は疾驅する人の心を一層輕やかにしてくれる。

約一時間で峠を越し四時過ぎに峠下のセーキヨフスキーの小部落の小流を渡り、四時四十分愈々目的地、ルイコフの一つ前の部落であるパレオの村門へ入つた。

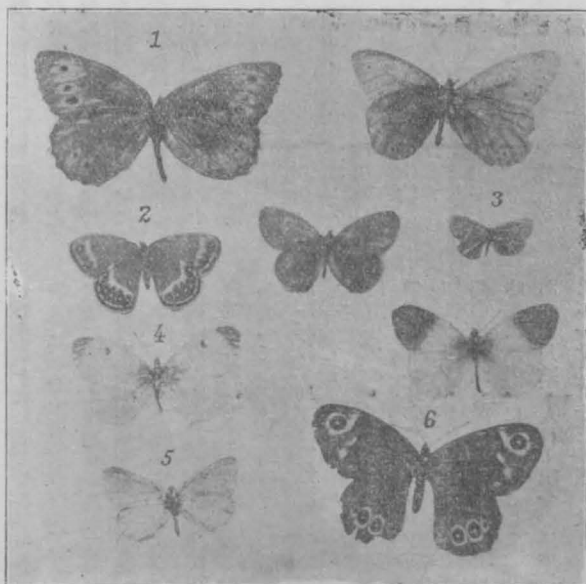
廣い焼野は愈々通り越して、大河ワイミの上流に合するウラスナヤ川の清らかな流れがカラフトクロヤナギ *salix macrolepis* *Turez* *G* *アロノキ*、*ハンヤナギ* *Salix florida* *Lacks* 等のヤナギ科やシナカンバ、ケヤマハンノキ等のカバノキ科の植物を擁して流れてゐる。走り通しの馬は腰らくは澄み切つた流に顔み埋めて動かうともしなかつた。馬鈴薯、キャベツ、烏麥等の農作物は折りからの驟雨に濡つて青々と蘇がへり、軒先に附近の流から採つた鮭を吊した家の戸には珍らしげに老若の露人等が佇んで一行を見送つてゐる。幾臺かの馬車は隊を放れて此の部落で別れを告げた。別れて行つた家内の者は遅ましい馭者と腕組みをして一行に笑顔を送つて歸つて行く。ルイコフまで一里餘、ドロノキやシラカバの小林や小流れを幾つか涉つて五時過ぎて始めてルイコフスコエへ入つた。

私に乗せた馬車は村の入口へ入つたばかりの家なので荷物と一緒に次の馬車に移つた。こうして二十幾臺の我等の一行の馬車はオノールとルイコフの兩河を中心とした方々から借り集めて用意せられたのである。一時馬車は派遣隊の司令部へ着いて後隊長の〇大尉の案内で一同は將校室と下士室とに納まつた。完全に一日を疾走せる馬車に暮して綿の襟になつた身體を隊の好意の入浴を終へて衣服を着變へて散歩に出る。

街條は一本であるが道幅が二十間以上もあり倉校式の大きな家屋の列びは北國の小邑獨特な落付きを見せてゐる。中央の教會堂と古風な大風車を具へた家とはこの街に一層キヤラクタイを興へてゐる。今此の街の輪廓を知る爲めに或る書籍に記する所を再録すれば、『ルイコフは本名ルイコフスコエと云ふが「スコエ」を切り捨てルイコフと呼ぶ。亞港から約十五里を東南方に距りツイミ河上流に位し山脈下にある町である。茲は日露戦争當時我が軍が第一アルコフ(亞港北方約三里の西海岸)附近に上陸して、リヤアーフ中將軍を追撃前進して、明治三十八年七月二十七日此の地に到り敵を軍門に下らしめた紀念の所である。露國帝政時代にはア港に次ぐ都として、郡役所、兵營、監獄、寺院等があり、戸數、人口も現今の三倍以上を有し、活氣ある町であつたが一千九百十三年頃大赦令の行はるゝや住民の多くは對岸に移住して漸次衰微した』とある。繁榮の頃の重要な建物だつたらしい表階段のある廢屋へ登り夕暗に包まれた街を見下せば牧舎に歸る牛の聲や誰かを呼んでゐる調子高い少年の聲が流れてくる。浴後のうすら寒さを感じて階段を下り立てば麓からは早

コホロギの細い聲が起つてゐる。疲れた休める暇もなく、今日ア港から送られた道具を以て之れから夜間採集をしなければならぬ身である。無意味な追想や詩人的な情緒に捕らはれて實學的の總てを擱むべく來た一念を失してはならなかつたのだつた。この夜充分に寒さを防ぐ用意をし

て二人の入夫と同僚のK君との四人連で宿舍近くの野原に三菱作業用一千燭火のアセチリンを點じて北樺太港第一回の夜間採集を行つた。夜間採集法は常所より底地へ燈火を照し、燈火に趨向する蛾類や甲蟲類を捕獲するのである。そのうち新種又はアンレコードのものゝみを擧げて見れば燈蛾科では苔蛾亞科 Nolinae のホシキイロホソバ *Philea irrorella insignata* Stgr. 夜蛾科では紋夜蛾亞科 *Euxoioe* のトモエヤガ *Manobia sachalinensis* Mats (n. sp.) ヒモンカラフトモトツ *Anomgyna bruneopida* Mats. n. sp. 夜盜蛾亞科 *Hadeninae* に屬してはウスムラサキモトツ *Polia subviolacea* Mats, n. sp.



北樺太の蝶類

1. *Oeneis jutta magna* Heyne. カラフトタカネヒカザ
2. *Coenonympha heros perseis* Led. シロオビヒメヒカゲ (表面及裏面)
3. *Everes ficheri sachalinensis* Mats. クロツバメ
4. *Anthocaris cardamines kobayashii* Mats. クモマツマキテフオウ (歐洲産)
5. *Lycœna eros erotides* Stgr. テフセンルリシシミ
6. *Parage deidsmia sachalinensis* Mats. ツマジロウラナミシヤノメ

ヒサゴキンウハバ *Phylometra nadeja* Obsh. 等を捕獲した。又尺蠖科 *Geometridae* には姫尺蠖亞科 *Acidaliinae* にカラフトヒメシヤク *Ptychopoda karatunensis* Mats. n. sp. 波尺蠖亞科 *Larentinae* に屬してはオホシロクロシヤク *Cidaria hastata*

齒形蛾亞科 *Amphipyriinae* にカラフトヨイロモトツ *Oligia rikovskensis* Mats. n. subsp. 枝尺蠖亞科 *Geometrinae* に入れた *tykingta hata shayak* *Arichanna melanaria aculeata* Mats. n. subsp. シロハダシヤク *Alaraxas er saulaniata karatunensis*

Mats. n. subsp. の四種を得た。此の一夜の北樺太最初の夜間採集で期待してゐた大型の蛾に屬する天蛾科 *spingidae* や天社蛾科 *Noctonitidae* に屬する類の一種も飛來するのを見なかつた。それに反して小型のシヤクトリやメイガ、コケガ、ホンガ等の類が非常に集まつて燈火に翅を焼いて落ちたそれからの昆蟲の屍は忽ち地上に推積したのであつた。又此の初夜の採集地は山林帯に遠く期待した蛾類は多く樹木に寄生する性質のものであるから、尙又の日の山地に入つた時を樂しみにして十二時頃宿舎へ引あげたのであつた。

八月三日晴、午前中は酒保へ出掛けて糖分を求めたり、散歩に出たりして暮し、午後はツイモフにある農事試験場へと馬車を走らした。試験場は立派な露園式の建物であつた。園藝部主任の K 氏に案内せられて試作圃その他を見る。昔から此地方に栽培せられてゐる諸種の農作物を初め北海道、本州等から移入した作物を試作してゐるが病菌と害蟲の爲めに悉く失敗に終つてゐる。明溝法を施した中には無数の夜盜蟲の幼蟲の屍が埋まつてゐた。

これは多分舊北洲の至る所に分布してゐるカブラヤガ *Exoxa segellum* Schiff. のモトウガ *Barathra brassicae* L. 等の類だらうと思はれる。又之等のヨトウムシに相對して樺太での昔からの害蟲であるカラフトクロウリハムシ *Imperodes praenatus* Matsch. は卵、幼蟲、成蟲等非常に不規則な發生状態を見せて大根、やその他の蔬菜類に一面に被害をしてゐた。私達はこの試作圃で以上の害蟲の敵蟲であるヒメベチ *Ichimonidae* ハリ

バイ *Takinae* などの寄生蜂や寄生蠅を少しく採集することが出来た。特に私達を嬉しめたものは極めて多忙の中から採集された K 氏の昆蟲採集品である。

その内でも愉快にたえないものは有名なクモワキテフ *Althea cardamines* L. を採集せられて居るところである。之は日本アルプスの高地に於て極めて稀に産する有名な高山蝶であつて、特に雄は容易に發見せられない種類なのである。K 氏の談に依れば五月の末にはこの附近に比較的多く見受けられるとの事である。之の種類は採檢を終へて教室に歸つてから松村教授によつて亞種 *kobayashii* Mats. として發表せられたものである。今その亞種としての歐洲産のものと相違する主要部四點を松村教授の論說を借りて擧げるならば第一、歐洲産の種類の様に中室にある黒點が長方形や三ヶ月形をなして居らずに二つに分離してセミコロン形をなしてゐる。第二、翅頂にある黒斑部には二箇の黄色小點が、八、九の脈間の尖端にある。第三、裏面の中室のセミコロン形紋は上部が小さく表面と同形である。第四、裏面後翅の斑紋は *Cardamines* と畧々同様であるが、白帯部が白く、黄色鱗粉が顯著である。此の幼蟲はハナタネバナ屬 *Cardamine* L. のベタザホ屬 *Arabis* L. 等の植物を食するものでヤルリン附近には五月から六月頃に亘つて普通に飛翔してゐるやうである。

甲蟲類の標本にも私達の始めて見るものがあつた。例へば吉丁科 *Buprestidae* のヤツボシタムシ *Buprestis guttata* L. などの叩頭蟲科 *Elatidae* のシムロメンキ *Corymbites Boeberi*

Germ. 等の未だ日本には未記録の種類を知る事が出来たのである。簡単に夜盗蟲や金花蟲やその他の害蟲の驅除法を話したり、採集法や保存法を御話して四時過ぎに私達はK氏と御別れて再びルイコフの宿舎へ歸つた。

次の日は小雨が降つてゐた。私は風邪氣味で臥せてゐる間に元氣なK君はネットを持つて植物のT君と川に沿ふて一里餘も採集を行つて歸つて來られた。蝶は雜草の陰に雨を避けてゐるので摘獲が容易で、つた爲か雨の日とは云ひ乍ら案外に立派な採集をしてゐる。初めて採れた種類はウスイロヘウモンモドキ *Melitaea athalia sachalinensis* Mats. コメヘウモン *Argynis pulco sachalinensis* Mats. テンセンナリシシミ *Lycena eros eroides* Sigr. の三種の珍品があつた。前二種は歐洲からシベリアにかけて廣く分布するものであるが此のサカリネンシスと名命せられたものはそれとは少しく違つてゐる。後者は其名稱が示してゐる如く朝鮮で採集せられてゐる。特にヒメヘウモンは後翅の裏面に銀色帯や銀色點とそれを圍んで紫褐色の帯がある非常に美しい蝶である。これ等の外に今迄捕獲した蝶類でより以上の完全なものも多數採集せられてゐる。午後は白石軍政署長の請に依つて生物庭の各科の代表者が軍政署の廣間で兵士の人々に各自が専門の通俗小講演會を開いた。私は家蠅の怖ろしさに就いて話した。

講演會が終つて私達は白石署長を始め憲兵隊の人々やその他の幹部の人々に招ぜられて盡食を共にして記念撮影をなした。デザートコースに入らるや一行中の硬骨漢G君が日本の北樺太保

證占領の否を卓を叩いて力説すれば圓満酒脱の白石置長が諄々と辯駁せられなどして氣持のよい食卓を放れて隣接してゐる小學校を參觀した。暑中休暇であつた婦人教員に案内せられて教室から運動場、標本室等隈なく觀て廻つた。文化的施設の乏しい僻地とは言ひ乍ら一通りの教育機關が完備し、特に理科學的教育には非常に留意してゐらしく、エンシロテフの立派な經過標本を始め、北樺太産の植物、礦物等の標本が集められてあつた。夕方散歩の途次教會堂の鐘樓へ登り小さな明り窓からルイコフの市街を俯瞰する。夕暮の立ちこめたツイミの流れに沿ふて明日走る廣い褐色の道が遠く白樺の森に消えてゐる。試みに吊るされた三つの大小の鍔の浮んだ鐘を小指で打てば沈んだ韻がいつまでも籠る。高い階段を一步づゝ下りて間もなく私達は宿舎へ歸つた。

八月六日晴、五時起床、七時半再び馬車を用意して十餘里北方のアダツイム村へ走らせる。馬車は軍用鐵道の終點である北樺第三の盛り場デルビンスコエを過ぎウオスケレーセースコエに着く。此處には軍政部の計畫による蛙の孵化場が建設せられてゐる。目下建築中で忙しい内を場の掛りの人から色々とその計畫を聞き馬車は再び北を指して走つた。ウスコーツォ、スリヤーツォ、ヒボリ、オーゼルク等の小部落を走つてゐる間に、私は始めてヒメヒオドシ *Vanessa urticae connexa* Butt. ユコオドシテフ *Vanessa xanthomelas* の姿を認めた。特にヒメヒオドシは非常に形が小さく、内地、北海道産のもの五〇糎平均に對し此の地方のは僅々四四糎位しかない。ツイミの流れに沿ふて

アダツイムは北樺太最北の部落であつて、二百名足らずの露

西亞人と若干名の朝鮮人、支那人に依て開らかれてゐる。又此所に一名日本人がゐて雜貨店を開いてゐた。宿舎に當てられた小學校に落着いて乾麵麴と牛肉罐の賣し夕餉を了へ守備隊が村民の爲めに造つた共同の露西亞風呂へ案内せられた。これは極めて原始的な構造で、部屋の片角に竈を設け、それに大きな玉石を列べて強く熱してゐる。その一方には手桶に水を置き絶えず燒け石に之を掛け室内は爲めに地獄谷の様に湯氣が濃々と立ちこめてゐる。中央には高く座が造られて人々は悠々と其處に腰をせり陶然たるうちに全身の汗と油とを流すのである。

我れ等は此の生活に於ても亦彼等の渾身の性格を伺ふことが出来るのである。浴後この最果の村に戯るゝ小童と友達となつて一帯の地を散策する。此處は北のマイウオ、チャイオの二つの守備中隊へ通ずる主要地で、半小隊位の守備隊が置かれ、無數の小流の注ぐことに依つて大きくなつたツイミ河は始めて舟航の便を開くに至るのである。守備隊は村落の西端に存して、此所を界にして地勢は一段低くなりツイミ河の沖積層の平地になつてゐる。守備隊の坂には清水が滾々と流れ出てツイミ河へ流れてゐる。この小さな流れにさへ鯉鱒類の産卵期に入れば多くの魚群がひたおしに上つて来るさうである。時違ひの一團

北樺太採集記（中）

山西省に於ける主要炭田

最新刊の某書に據れば山西省の主要炭田は次の如く其の總量五百六十餘億噸に及ぶと云ふ。因に云ふよりヒトホーフエンは嘗て山西の炭量を千九百五十二噸と計算せることあり。

之產
其地

地質時代

種 鐵量百萬噸
六、九八二

大同

二疊紀 渥太華

七〇七

安(長治)

同
無

六、七九〇

易州(晉城)

同同

四四、七七〇〇

高平縣

同 無

二六〇〇

山西
北
靜
樂、
日、
每

司

133.

大青山(綏遠)

朱維紀
無西

六五〇

廣靈

朱羅紀 無極

三、七、四
三、五、九

三餘容齋學義

同同

一七六

川

同
無

煙、瀝青
一一六

3

三